3 校に磨かれ鋭い歴史の新鋭

鳳凰

充実環境と若き監督の〝牽引力〟

写真◆真嶋和陸

常連校が、入れ替わり立ち替わり上位に並ぶ女子高校剣道界。その勢力地図に近年、耳慣れない名前の学校が彗星のように現われた。鹿児島県にある鳳凰高校である。鳳凰高校は、平成11年3月の全国高校選抜大会において、初出場第3位という鮮烈デビューを飾り、今年8月に岐阜で行なわれたインターハイでも堂々第3位、実力を証明した。その登場が唐突に思えたのは当然と言える。というのも鳳凰高校剣道部はまだ創部4年目という若いチームだからである。これだけの短期間で全国有数のチームを作り上げたのが、財前政樹監督だ。

自分の思うチーム作りを目指し大学卒業と同時に鳳凰へ

12万6千平方メートル――。ちょっと想像できないぐらいの広大な敷地に幼稚園、専門学校、自動車学校までが立ち並ぶ中に鳳凰高校はある。前身は加世田女子高校という実業高校で、衛生看護科、保育科などの専門学科があるため、これらの施設が次々にできたのだという。さらに驚きなのは武道館だ。屋根が世界初の屋根型太陽光発電という2階建て。剣道の試合場が2面、柔道の試合場が2面とかなりの余裕をもって取られている。そして極めつけは8棟もある寮である。約800名もの生徒を収容し、冷暖房完備、温泉をひいたお風呂までついている。

この素晴らしい設備を持つ加世田女子高校が「鳳凰高校」に校名を変更し、財前政樹監督が赴任してきたのが平成8年のことだった。

財前政樹監督（28歳・五段）

財前監督は、昭和46年岐阜県に生まれ、高校までを岐阜で過ごした。中学時代は中体連県大会個人で2年連続優勝。県立岐阜高校に進学し、そこで村瀬隆平氏（教士七段、第14回全日本選手権大会第2位）の指導の元さらに剣道を磨いた。鹿児島大学に進学して、平成6年の全九州学生剣道大会（団体）で36年ぶりの優勝を飾るなど活躍、もともと教員志望だった財前監督は、卒業時故郷の岐阜からも誘いがあったが、「この学校で設備を整え剣道部をつくるという話をいただいて、これはいいと思いました。自分の考えたチーム作りができるかなと」一からすべてを作り上げることができる鳳凰の教員となる道を選んだ。

着任した翌年からは、学校側で正式に剣道を強化することが決まっていたが、財前監督は着任直後から稽古をスタートさせていたという。「剣道をやりたい」と希望した生徒と二人、まだ武道館も建っていなかったため、体育館のステージや卓球場、市の武道館と渡り歩いて稽古、団体戦の時は生徒をかき集めて出場した。翌平成9年に特待生も迎え入れ、武道館も完成。鳳凰高校剣道部として本格的に始動する。そしてこの年の8月、早くも大麻旗大会で第3位となり、存在をアピールすることになった。

それからの足跡はあまりにも短い。主な戦績をあげてみる。

平成10年2月　全国選抜大会予選第2位
平成11年1月　全国選抜大会予選優勝
3月　全国選抜大会第3位
4月　三条杯大会優勝
平成12年4月　三条杯大会第2位
6月　インターハイ予選優勝
8月　インターハイ第3位

「平成10年の選抜予選2位は、勢いに乗ったのでしょうね。部員は7人、そのうちひとりは初心者という構成で一歩間違えれば全国に出られていたわけですから」

次のインターハイは、と期待が高まった。しかし、予選では上位進出もならなかった。

「3回戦ぐらいだと思うのですが、代表決定戦で相面になったときに旗が二本一本に割れて、負けてしまったんです。これには生徒も私も大泣きでした。ですがそれで一本の大切さが身に染みて、生徒に集中力がでてきた。次の1月の選抜予選で優勝できたのは、この時の負けがあったからかもしれません」

そして初の全国の舞台、全国高校選抜大会でトントン拍子に勝ち進み第3位。全国

に名前を知られることとなった。だが、平成11年のインターハイもまた逃してしまう。「県予選の決勝リーグで勝者数で負けてしまったのです。創部してすぐに全国3位になって、気が緩んでしまった」

インターハイの切符はそう簡単に手に入るものではない。しかも鹿児島には、神村学園、樟南、鹿児島高校と全国でもトップレベルの高校がひしめいているのだ。それでも、財前監督にはインターハイに特別な思い入れがあった。

「私が高校3年時、個人でインターハイ予選に出場できることになったのですが、試合前に膝の皿を割る怪我をしてしまった。出場はしたのですが案の定負けました。それもあって自分の教え子をいつかインターハイに出したいと思っていたのです」

その夢が、この夏とうとう叶った。

部員は男女合わせて33名。この日は31名が稽古に参加していた

寮の部屋は4人部屋。ここでは、元主将の水流（つる）真子さん、現主将の藤田絵里奈さん、松下さやかさんが生活している。もうひとつのベッドに合宿中は通学の生徒が泊まり込む

右から武道館。奥に見える体育館、給食センターと並び手前の白い建物が第7しらうめ寮。ここには女子のスポーツ特待生が入る。武道館までは歩いて30秒というところ

稽古は厳しく、普段は楽しく その切り替えが 生徒を伸ばした

この急成長の源はどこにあるのだろうか。まず一つは、時間をかけて基本を教え込むことにある。

「ウチは1年生でレギュラーになるということはめったにありません。最初の1年は、とにかく基本を直さないといけない。その1年があって2年、3年で勝負するのです」

その徹底ぶりはすさまじく、年3回の休みに行なう合宿では休憩を挟みながらも5～6時間つきっきりで指導したこともあった。最近は気になる点を言いたくなっても我慢していますが、と財前監督。

「自分でやれば4時間かかることも私が教えれば2時間で直ります。でも、これはやっぱり『ニセモノ』ですよね。つきっきりで指導していると〝最後には先生が直してくれる〟と安心して自らは何も追求しなくなってしまう。倍の時間を使っても、自分で直す方が確実に『本物』になりますから、甘やかさずに突き放すようにしています」

手取り足取り教えることから自分で考える稽古に変化をさせながらも、1年間の基本修業は変わらない。

そして、短期集中も大事なキーワードだ。毎日の稽古時間は2時間、朝練もない。そう聞くと他の学校に比べ練習量が少なく感じられるが、実際は違う。稽古の「密度」が違うのだ。授業が終わると生徒は全力疾走で稽古に駆けつける。緊迫感あふれる稽古中は、「妥協」や「適当」を一切許さず、素振りはもちろん、気合、移動にいたるまで全力を出し切らせる。この厳しさには、合同稽古に来る学校のほとんどがついて来れないほどだという。それでも足りない部分は長い休みのたびに行なわれる1週間の合宿で補い、さらに根を詰めて稽古する。

しかし、鳳凰の本当の底力は、屈託のない明るさとそこから来る勢いにある。これだけ徹底した厳しさで稽古をしていても、悲壮感がなく、面を外すと笑顔が見え、みな楽しげなのだ。大会の会場でもその雰囲

寮内にある風呂。ジェットバスや打たせ湯までついているというから驚きだ

鹿児島高専が合宿に参加して稽古。それでも充分に動ける広さだ

練習試合を見て檄をとばす。「2年生の子がたすきをつけずに試合をして……。集中力に欠けていると指導したんです。試合に勝てばいい、というのではなく自分で勝負に臨む過程をもっと追求して欲しい」

気は変わらず、伸び伸びと戦う。

「勝っても負けても笑顔でいこうということで、試合には臨みます。二本負けでもいいから笑顔で帰ってこいと。それで本当に負けても笑顔で帰って来るんですけれど(笑)。負けを恐れないんです。それと、私は最後まで生徒を信じるようにしています。2—0で負けている、といった土壇場でも口を挟まない。練習試合でも最初にミーティングで『二本勝ちを狙え』とか『メンだけを取りにいけ』とか、その程度。公式戦ではほとんど言いません」

また、上下関係も必要以上に厳しくしない。寮の食事も武道館の掃除も全員で交代制、洗濯も自分のものは自分でさせる。

「ウチは礼儀に厳しくない、と思われることがありますが、私は上級生になったら、自分を上級生だと思うなと言うんですよ。下級生のつもりで動けと。しかし、下級生には常に自分は下級生であると自覚するように言っています。そこさえしっかりしていれば、他はそれほど言いません。食事中でも自分たちだけで外で食べているときはワイワイとしてもいい。行儀が悪いのは分かっていますけれども、かしこまらせると暗くなりますから。インターハイの時も宿舎から会場まで車で30分ほどありましたが、移動中子供たちは歌を歌ったりしています(笑)。私はこの〝子供らしさ〟を奪いたくないんです」

「明るくけじめのあるチーム」が理想だったという財前監督の、厳しくする部分と、そうでない部分の指導の切り替えのうまさが生徒を伸ばしたことは間違いなさそうだ。これからは、男子でも実績を残したいと財前監督は言う。平成9年に共学となってできた男子剣道部はまだ創部3年目だ。

「男子もこれからが勝負です。インターハイ予選では鹿児島商業に負けてベスト8でしたが力はついてきました」

男女で全国を席巻する日もそう遠くはないかもしれない。

3年生で鳳凰の歴史を作ってきた水流真子さん、杉元祐子さんに話を聞いた。

——鳳凰の急成長の要因は？

水流・監督のおかげじゃないでしょうか

杉元・日本一の監督ですから

水流・信頼しきっています。練習では厳しいですが、試合になったら一番盛り上げてくれる。稽古の成果を発揮できるんです。それで試合中ぱっと見た時の監督の笑顔

杉元・あの笑顔を見て「よし、がんばるぞ」って(笑)

水流・「いける」と思えるんです(笑)

——練習で特にきついのは？

水流・できるまでやるところでしょうか。とにかく何度も繰り返して技が「できて」終わる

杉元・最近はみんなも納得しないと終わらないようになりました

水流・短時間できちっと仕上げるという感じの練習なので、集中してやれば終わる、と思えるからがんばれるんです。

——いつも楽しそうに見えるのは？

杉元・たぶんみんな後悔していないんだと思います。鳳凰に来たことを

水流・練習の時は厳しく、それ以外の時は楽しくやっていますから

3年生の水流さん（写真中央）、杉元さん（写真右）が下級生に指導。財前監督はその内容をまったく聞かない。生徒同士だからこそ分かる部分、教えられる部分があるからだという

稽古拝見

試合前と日々の稽古を使い分ける

●監督が元に立つ30分のかかり稽古

試合の1カ月程度前になったら、財前監督が元に立ってかかり稽古を行なう。ポイントは、かかる側が7人ぐらいの少人数で30分程度と長丁場なこと。普段は生徒同士でかかり稽古をする。

「試合直前に間合を教えたり、応じ技、出頭、相手の打った後、つばぜり合いの瞬間などにいつでも打てる状態を作るためにするかかり稽古です。避けたり、相小手面を打たせたり、面にいったら胴に返したりと、実戦に近い形で行ないます。生徒同士でやると、受ける方が休んでしまうんですよ。しかし実際の試合は動いた状態の中でのスキを打つものですから、その感覚をつかませるんです。

しかし、いつも私が受けていると私の身長が高いですから、女子の場合は常に高い打点で打つことになる。そこで手の内を決めてしまわないように、普段は生徒同士でやるのです。もちろん時間的には短い。このかかり稽古をするときは稽古の最初に持ってきます。例えば1時間基本をやってからでは体力的に無理ですからね」

●徹底した基本指導

打突の仕方から、足さばきまで何度も生徒を集めて指導する。この日指導した部分を解説してもらった。

「打つときは一足一刀の間合で、継ぎ足をせずに右足から一拍子で跳ぶ。これは大事です。入ってきたばかりの生徒で継ぎ足しないで打てる子はいません。継ぎ足をしない方が早いことは分かっているのにできない。また、切り返しは早く、しっかりと面の部分を打つ。こういった基礎から直していきます。

今日は切り返しの面を打つ前に15秒間しっかり声を出して、そこから面を打ち始めるように言いました。発声練習にもなりますし、追い込み練習でも結構きつくしているものですから、最後の切り返しになると適当にやってしまうので。まず気合を100パーセント出し切って、120パーセントで打つためです。時には声を出してからかかり稽古、というときもあります」

●15分の自由稽古

毎日2時間の稽古の間に15分間好きな練習ができる時間が設定されている。その時は何をしても監督は見守るだけだ。

「この時は、生徒のやっていることに口を出さないで自由にやらせておくようにしています。それでいいアドバイスができないかな、と考えるんです。ただ、この時間を多く取ってしまうとかえって能率が悪くなりますから、毎日15分間だけ設定する。まだ未熟な生徒は、逆胴の練習より面打ちの練習をした方がいいのですが、子供たちは新しいことをやりたがりますから逆胴の練習も黙って見ている。すると、3カ月もすれば下手なりに上達するんですよ。そこでアドバイスをするようにしています。

互いに打ち合うかかり稽古で30分元に立つ監督も大変だが、生徒もきついはずだ。だがみんなで声をかけ合い全力でぶつかる。体当たりも激しい

継ぎ足をしない面打ちの指導。全体的に、時には個人的に声をかけていく

真夏の挑戦⑥

21日から金鷲旗・玉竜旗大会

3年で全国レベル

新勢力

鳳凰　財前政樹監督

鳳凰高（鹿児島県加世田市）の女子剣道部は三月の全国高校選抜で3位に入賞した。伝統校がしのぎを削る剣道界で、創部わずか三年で全国のトップレベルに名を連ねた新生校の原動力は財前政樹監督（二七）だ。

「高いレベルの中で自分の指導力を試したい」。岐阜県生まれの財前監督は体育教師を目指して鹿児島大に進学、同県の剣道のレベルの高さに触れた。卒業時に受けた岐阜の高校からの誘いを断り、鹿児島に残っての剣道指南を決意。ゼロからスタートする鳳凰で強豪校に挑む道を選んだ。

財前監督が就任したのは同校が「加世田女子」から現在の校名に改称した一九九六年。だが、この年に剣道部を志した生徒はたった一人だった。大会の度に、校内から生徒をかき集めての団体戦出場の苦労も味わった。その唯一の部員が県大会個人戦で3位に入賞、翌年から部員が集まって〝助っ人〟なしで団体戦を戦えるようになった。

「正直、うれしかった。これで鳳凰の剣道がスタートできる、と」

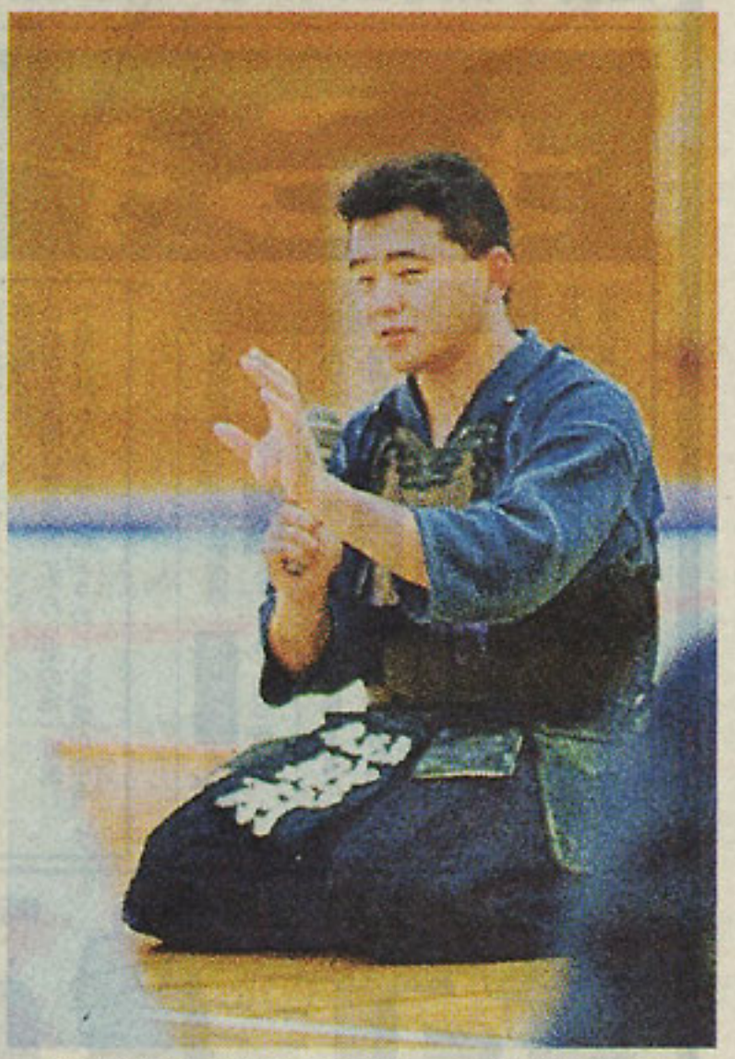
だが、人数がそろっても、中学時代に全国レベルの生徒は他の強豪校に流れてしまう。財前監督の指導方針は、基礎の徹底。二時間半の練習中、メン打ちだけやコテ打ちだけの練習を指示したこともある。練習内容に驚いた生徒も構えから打ち方、足の運びまで、基本ができていなかった自分に気づいた。今では「これが鳳凰の剣道」と胸を張って試合場に立つという。

今年一月の鹿児島県大会で初制覇、三月の全国選抜で3位に駆け上がった。しかし、六月の高校総体同県予選ではまさかの3位。全国大会はおろか、九州大会の切符も逃した。「あっけなく終わった。今度も全国に行けると思っていたのに…」（財前監督）。一本取られる度にざわめく体育館の雰囲気に生徒たちがプレッシャーを感じ、いつもの動きができなかった。常勝校への道は厳しいと感じた一瞬だった。

そして臨む玉竜旗。創成期の鳳凰剣道部を築いた三年には最後の大会になる。「一試合一試合を大切に、生徒たちと一つでも多くの試合をしたい」。武道場に掲げられた「全国制覇」の文字。自分たちが切り開いた歴史にこれ以上ない一ページを刻もうと、鳳凰女子剣道部は玉竜旗にかける。

（武富　悟）

＝終わり＝



創部3年で全国のトップレベルに導いた鳳凰剣道部の財前政樹監督